



根本環高高等学校

→ 若さの勝利



とんぼ祭

第20回 とんぼ祭
記念講演会



→ 「あたしの身になって頂戴！」
演劇公演「みんな我が子」



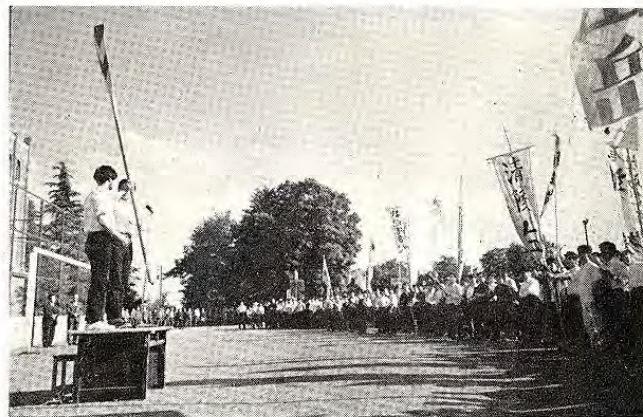
交歓会



そろそろ眠気が……
徒歩隊

→ やるぞ!!

クラスマッチ



★ ナイススパイク!

↓ 清陵の猛者連到着





→ みんなで円く輪になって
座談会



→ ステキノカッコイイ
詩吟発表



← 浪人会館？完成

校友第十七号(通巻百七号)目次

表紙……………米倉 京子
 写真提供……………望月先生・新聞部
 カット……………福島雄二・その他

はなび……………井沢 泉(2)
 この人生……………赤羽 誠(5)

あゆみ……………編纂委員会(36)

論壇

深志のクラブ活動……………東 宗謙(38)
 高校生活雑感……………山中 照栄(41)
 創造と批判をして遊び……………松崎 充博(47)
 さかさざり……………阿久津美穂子(48)
 随想……………宮坂 学(50)

日記

日記より……………水上 頼隆(52)

紀行

南紀州の旅……………中川 俊夫(55)
 北陸夜行走……………内木 元義(59)
 委員会だより……………(115)

随想

詩

詩七篇……………輪湖 豊(84)
 そぼ降る雨のたそがれに……………土橋 俊二(90)
 詩二篇……………平林 昌広(91)
 詩四篇……………高相 民夫(93)

〈先生〉

思い出のセイちゃん……………青山 誠(23)

〈先輩〉

女子学生のみなさんへ……………影山 裕子(26)
 — 未来を創造してください —……………中島 嶺雄(28)
 国際政治の旅路……………

寄稿





とんぼ祭、交歓会

——とんぼ祭記念講演——

若いころ

島崎 敏樹 (8)

——交歓会弁論会——

深志というもの

清野 吉光 (64)

『思考の原点』について

赤堀 正明 (68)

とんぼ祭への提言

新しき姿を求めて

井沢 泉 (71)

思うこと

小原 順 (81)

峠の茶屋

編纂委員会 (96)

特集——西穂レポート——

亡き友へ

(143)

西穂高岳独標における遭難報告

鈴木 重春 (148)

合同協議会回顧

学芸部
運動部

(129)

(120)

埼玉国体にて

萩原 清 (141)

作

あやつり人形

——稗田阿礼の物語——

望月 雅文 (101)

創

ほたるは

C

(108)

編集後記

(171)



はなび

生徒会長 井 沢 泉

西穂遭難で十一名の友を失いました。今更ながら人知の及ばない自然の脅威にただ驚くばかりです。幾人か知っている人もいました。でも初めて聞いて、それが最後という人もいました。しかし恐らく私の生涯にとって掛けがえのない記憶？体験？実感？としての十一人となるでしょう。ここで再び生きていることを考えさせられるのです。気障でしょうか。私達、否私にとってやはりまだ死は観念なのです。こういったことを考えているとき、次のような童話を讀みました。

星の王子さま——あのサンテグジュペリの星の王子さまです——には妹がいました。

王女さまは、やはり自分の星を出ていろんな星を旅して歩き、いろんなことに出会いました。そして地球へやって来ました。

ここでもいろんなことに会いましたが、たったひとつ楽しい経験をしました。王女さまは、そのことをだれかに話したくてたまらない気持ちでいました。そんなとき、ぼくに会ったのです。

ぼくは星の王子さまのことは本で読んで知っていました。そして、星の王子さまにもきつと妹がいるんだと思っていました。ぼくには、小さい妹がいるからなのです。

ぼくは、とっさに思いました。あつ星の王女さまだなんて。やはりそうだったのです。

“私、地球へ来て珍しいものを見つけたのよ、何ていうのかしら？ほんのちょっとのあいだだけど、きれいに光を放つのだ！”

とすぐに話し始めました。そして話を聞いていくうちにそれは線香花火だということがわかったので、そのことを教えてやりました。一番安いこともつけ加えました。

“そう、でも、きれいだっただわ！ああいうのを美しいっていうのかしら……まっくらな中でひとつだけ輝いて……この星へ来てからいろいろなものを見たわ、でもみんなこの星にもあったことなのよ……この星のひとつてみんな頑張っていたわ、でもあの線香花火？線香花火のようなことはひとつもしてないってことに気づいたの、だから私は寂しかった……でも線香花火を見たときは、思わず立ち止まって、今までのことはすっかり忘れてしまったのよ。ほんの一瞬だったわ、でも楽しかったわ、私の星に咲いている花みたいだったの、花火って生きているのね”と楽しそうに話すのです。王女さまの目の奥には、花が一本咲いているようでした。それほど王女さまの目はきれいだったのです。

すると、王女さまはそつと右手をぼくの前に出しました。ぼくは驚いて見ると、ちっちゃな手に、またちっちゃな穴があいているのです。王女さまは言いました。

“おどろかないで！私、ちつとも悲しくないの、これにはわけがあるの、聞いて下さい。線香花火を見ていたときのことなの、私は花火のことで胸がいっぱいで、じつと見つめていたの、そのとき、うしろから、だれか近づいてきました。とっさに思いました。花火をとられはしないかって。そんなこと考えたら、思わず、その花火を手をつかんでしまったの、もう私のものだ、だれにもとられはしないって思ったわ。ちつとも熱くなんかなかったの、何という楽しさだったんでしょう。これは私の楽しい思い出なの”

と、また手を私の前に出すのです。そう言えはちつとも痛そうではありません。ぼくは大切なことを聞いたような気がしました。そしてマッチ売りの少女が、一本のマッチをすつて、暖かい楽しい世界へ入っていったという話を思い浮かべました。王女さまに話してやりました。すると、王女さまは言いました。

“地球って、すばらしいところなのね、きつとマッチ売りの少女は楽しかったんでしょうね、私、嬉しいわ！”

と、そのときです。突然、ぼくと王女さまと話している真上を、打ち上げ花火が上がったのです。王女さまも、ぼくも、何もかも、そこら中、たった今までまっ暗だったところを、王女さまの線香花火だけが光っているところを、王女さまの一本の花が咲いているところを、みんな照らしたのです。ほんの一瞬です。

王女さまはもちろん初めてです。黙って目をつむっていました。王女さまの手を見ると、不思議なことに、さっきのちっちゃな穴はありません。ぼくは王女さまが何を考えているか聞きかかったのですが、やはり聞きませんでした。王女さまは話したくなかったのです。いいえ、王女さまはそんなことは考えていなかったのです。

ぼくは心の中で思いました。そうか、王女さまの心に、さっきの打ち上げ花火が光ったと同時に、前よりも、もっともっと大きな穴がどかんとあいているんだって。ねっ、王女さま、そうでしょう。

王女さまは、ひとりごちのように言いました。

「わたしの星から、この地球も他の星と同じように光って見えるわ、でもそれは、線香花火が光っているからじゃないのね、打ち上げ花火が光っているからなのね」

不意童話集より

この童話で言っていることは、何なのでしょう。花火を線香花火と打ち上げ花火とに分けています。単なる大きさの違いでしょうか。私は単に大きさの違いや、ニュアンスの違いだけを感じません。線香花火にあればど感激した王女さまが、打ち上げ花火を見たとき何を考え、何を感じたかが問題なのです。私はこの花火とは極めて象徴的に使われていると考えます。花火が、ときに恋愛になり、一生の仕事になり、ひとによってそれぞれ異なるのです。一生かかることもあるかも知れませんが、一日の中で、あるいはひとつのことをするときにもあるかも知れないのです。ここに大きな問題が投げかけられていると私は思います。それは私達が生きていくが故に出き得る特権だと思ふのです。そして、美しく花開いてその瞬間にはあとかたもなく消えてしまうことに象徴された花火が、もうひとつの問題を投げかけるのです。悲しみの気持ちさえ、花火、とくに打ち上げ花火から受けるのです。しかし私はこういった悲しみが無いとしたら、その方がもっともつと悲しいと思えさえるのです。それは、線香花火の場合に外なりません。この花火が、大きな夢になるか、悲しい物語になるか、それはわかりません。しかし、喜びの気持ちと悲しみの気

持ちと、ふたつは切り離せないものだと思います。

この花火を求めようとする気持ちには、ロマンチストだけが持つ気持ちではないと思います。花火は、は、な、び、十分に説明できたとは言えません。でも、それは目には見えませんが生きているのです。では頑張ってください。

この人生

学校長 赤羽 誠

私は十日ほど前、「親子鼓」という題名のテレビを見た。連続番組「ある人生」のうちのひとつである。それは歌舞伎の囃方の一流派、田中流十代家元、田中伝左衛門が、その娘令子におのが芸道を伝え、家元を継がせんがため、激しい稽古をつけている場面をうつしていた。

対座する父は六十歳、娘は高校三年生である。鼓一筋に五十年を生きてきた父の底力のこもる気合、はり扇の音に応じて、その娘は、自分のゆるみなく鼓を打ちこんでゆく。「破」から「急」にかかったと思うや、間髪を入れず、「気を抜くぞ」という叱咤が飛ぶ。すると娘はまた曲のはじめにもどって、打ち直す。不十分な曖昧な「手」がほんのわずかであっても、その部分だけの訂正ではすまされないのである。芸は終始、隙のない力と高い品格を保っていなければならぬ。舞台にたつ時の覚悟と同じだ。稽古で業をしてはいけない。こう父は叱る。何回も「はじめから」という稽古がくりかえされ、両者とも極度に緊張した場面が続く。正座した姿勢は崩れない。もはや、親と子、師弟としての対座ではなくて、両者が一体となって、無用なものをすっかり捨て去った。何か激しい力いっぱいなもの

響きあい、ぶつかりあっている。そのさなかの私は、鼓の迫力に圧倒される「心」の外には何一つなかった。こうして娘は、父の芸の道を、その伝統を文字どおり体得して、やがて本当に、自分の生み出したい「音」を創造してゆくにちがいない。道の要求するところは、あくまで厳しく高く、しかも、囃方の地位は低く、かげの存在なのだ。

中学時代、彼女はバレーボールの選手であり、その一流になる事に憧れていた。けれども、この家元では、長男が旧制高校、大学を経て技術家になってしまった。何人かの子供のうち、家の芸を継ぐ素質をもち、その可能性のある者は、彼女をおいて他にはない。父は敢えて、鼓の生命ともいうべき指のために、このスポーツをやめさせた。この事で泣いた彼女が三年たった今は、後継者としての自覚を抱いて、父の期待にこたえる「音」のさせない事に涙を流すまでになった。

画面はまた、この家の夜のひとときの団欒を描く。父は旧制高校の寮歌と各高校の特徴を娘たちに語ってきかせる。その顔には、かつてある別な夢を追い、迷った多感なりし若き日の片鱗も窺えるが、もはや名人といわれた先代の後継者となりきって、今、娘と同じ苦しみを与えようとする父親の覚悟のほどを思わせる。親子のはげしい稽古の夜が過ぎて、翌朝、娘の挨拶をうけて、その晴れやかな瞳にほっとする父親の姿もうつつし出される。

私はいつしか、論語の「学時習之」という教えの「習」を思いだしていた。

このテレビは再放送であったので、ある雑誌に次のような批評がでていた。「これを観た女子高校生三名が、花東をもって、歌舞伎座の楽屋へ訪ねてきた。令子に逢って、開口一番の質問が、あんなに叱られて父親に『反発を感じないか』ということだった。すると令子は、おおらかな微笑を浮かべながら報告する。私はなるほどと膝をうった。高校生の質問が、いかにも当世ふうであり、まずそれを探ねる。そのように尋ねるしか術のない彼女たちの日常の貧しさと不幸が滲みでているからであり、同じ世代でありながら、一芸の家元として父親を尊敬しながら生きている令子の生甲斐を逆写しにしているからであった。」更に「芸によって結びつき、その伝承と継承をめぐって、親子互いの烈しい意欲の有無が父の叱正を尊敬と反発とにわけられるのではないか。現代は親子間において、共通する何ものかの授受をめぐって、緊張する瞬間とか、けじめをつけることなどが失われている。」とつけ加えている。

この若い家元の後継者は、この三月高校を卒業して、今は大学の一年生、あの厳しい稽古と学校の勉学で、就寝はいつも午前一時になるといふ。私は、彼女がこれから十年、二十年先の時代をどのように生きぬくか、見守りたい感動を覚えた。

この人生は、芸道の伝承という特殊な社会のことであり、これによってすべての生き方を律するということは、妥当でないであろう。しかし、我々はこの道のなから、最も大切な教えのいくつかを学ぶことができる。

もう雪の来た穂高岳にむかって、私は自分のことばのむなしさを、今更のように痛感している。この悲しみに、我々と君たちがどのように描いて、その中からどのようなものを生みだしてゆくかが、もう一つの我々の大きな重みをもった課題なのだが、この事については、後日の追悼文集、調査記録に記したい。

あゆみ



- 昭和四十二年度生徒会役員
 会長 井沢泉 副会長 小池光典 高橋忠久
 議長団 等々力正夫 望月雅文 上島 正
 応援団長 滝沢寛剛
 学協会長 小原 順
 運協会長 市東正生
- 6月2日 遠足
 一年生―聖高原 美ヶ原へ
 二年生―霧ヶ峰に集中
 三年生―戸隠に集中
- 7月8日 全校クラスマッチ
 一位 一年三組
 二位 三年八組
 三位 三年九組
- 12月5日 熊井啓氏講演会「日本映画の青年
 の思想」映画「日本列島」上映
 15日 合唱コンクール
 一位 三年六組
 黒人霊歌より This of Hammer
 二位 三年二組
 白い季節
 三位 三年一組
 母はるボルガを下りて
- 5月25日 一年学年クラスマッチ
 8月1日 二年学年西穂集団登山隊落雷に遭遇
- 9月1日 十一名の友を失う
 10日 合同学校祭
 2日 とんぼ祭準備
 2日 開祭式 弁論会 合唱発表会 先輩の話 座談会
 3日 展覧会
 4日 展覧会 哲研討論会
 5日 演劇公演 座談会
 6日 大掃除 島崎敏樹氏講演「若い心」座談会
 7日 詩吟発表会 音楽会 座談会 閉祭式
- 昭和四十三年度生徒会役員
 会長 高橋忠久 副会長 輪湖 博
 議長団 佐藤文康
 応援団長 上島 正 小原隆男 酒井 修
 学協会長 飯沼健樹
 運協会長 三沢貞夫
 大岩洋介
 10月27日 全校クラスマッチ
 一位 三年四組
 二位 二年九組
 一年三組

生徒会室の隅に置かれてある机、それが校友誌委員会唯一の仕事場である。北風のふく寒い寒い仕事場である。
 委員欠席による人手不足など幾多の障害のうえに、この仕事場から「校友」が生まれたのである。
 さあ皆で「校友十七号」の誕生を喜び合おうではないか。「校友」は皆の校友であるはずなのだから！

仕事が終わって、空いっばいの星を見上げながら帰る時、とても寂しい気持ちになりました。どうか皆さん、この校友を読み終えたら、亡くなられた十一人の友の名を頭の中にもう一度くりかえして思い浮かべて下さい。

一生懸命やったつもりですが満足な事はできなかったみたいです。急いし中で協力して下さい。三年生のみなさん、ほんとにありがとうございます。

校友誌編纂委員

- | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|
| 一 年 | 丸山 治久 | 胡桃沢利光 | 宮島 君夫 | 小林 雅恵 |
| | 小原 典子 | 田村貴以子 | 藤井 幹子 | 赤羽 永子 |
| 二 年 | 奥村 秀人 | 内田 清志 | 花岡 洋介 | 原 秀雄 |
| | 丸山 栄一 | 福島 雄二 | 矢崎 篤信 | 伴 信 |
| 三 年 | 上条やよい | 田内 正一 | 清野 占光 | 窪田 光一 |
| | 岩垂 猛志 | 首藤 輝久 | 上条 俊明 | 宮沢 温 |
| | 矢花 和成 | 菅原 考二 | | |
- 協力 望月 義宏 顧問 藤岡筑郎

校友第十七号(通巻百七号)

昭和四十三年一月 十日 印刷
 昭和四十三年一月十六日 発行 [非売品]

編集人 松本深志高校校友誌編纂委員会
 編集者 宮 沢 温
 責任者 宮 沢 温
 発行人 井 沢 泉
 発行所 松本深志高校生徒会
 印刷所 信毎書籍印刷株式会社
 (長野市西和田四七〇番地)